

インド世界遺産の旅(16 日間)

旅への誘い

独創的な文明・文化論で知られる民族学者の梅棹忠夫(1920~2010)は「文明の生態史観」(中公文庫)で、ユーラシア大陸を「西洋と東洋」という枠組みによって区分することを否定し、西ヨーロッパの数カ国と日本という高度に発達した文明国家を第一地域、それ以外のユーラシア大陸全土を第二地域という区分で説明しようと試みた。

彼はインドなどへの旅の体験をもとに、日本や西ヨーロッパ諸国がなぜ急速に近代化したのか、インドやアジアの諸国はなぜ近代化が遅れたのかを考える。その結果、日本や西ヨーロッパの文化は同質で共通点が多く、インドなど「中洋」の国こそ異質な地域であると指摘した。

旅は異質なものに触れることに意味がある。私は半世紀前、初めての海外旅行の地にインドを選んだ。インドの喧騒と混とんは、大学でモダニズムの思想になじんでいた私にとって脳震盪を起こしそうな衝撃を与えてくれた。日本とはまったく異質な文化との出会いは大きな衝撃だった。世界はこんなにも多様なのかという驚嘆は、私の世界観を根底から揺さぶった。

今回の旅は、インドのこの多様な文化遺産を見て回る旅である。インドはインダス文明以来、バラモン教、仏教、ジャイナ教、ヒンドゥー教、シーク教、イスラム教などの宗教を軸とする独自の文明と、カースト社会を形成した。さらに多様さを生んだのは、マウリヤ朝やグプタ朝、ムガル帝国などインド亜大陸のほとんどを統一支配した王朝はあったが、その期間は短く、地域政権が分立する時代が長く続いたことだ。

インドは大きい。インドの世界文化遺産は 32 か所(2021 年 8 月時点)が登録されているが、このうちの 14 か所をいっぺんに巡ってしまおうという大胆かつ意欲的な構想を立てた。インドの旅行会社にこれらの遺跡を車で巡る一筆書きのような地図を送って企画を依頼すると、一笑に付されてしまった。「インドは巨大な国であり、日本のように新幹線も高速道路網もない。道路事情は悪い。車は最小限にして、航空機での移動を考えるべき」という訳である。何度も旅行会社と相談を繰り返し、ようやくまとまったのが添付した日程である。

ムガル帝国が築いたタージ・マハルやレッド・フォート、フマユーン廟をはじめ、ムガル帝国以前にデカン高原に花開いたヒンドゥー教を信仰する王朝の遺跡であるカジュラホ遺跡やハンピ遺跡、古代三大宗教「仏教・ヒンドゥー教・ジャイナ教」の石窟寺院が一同に会する世界で唯一の遺跡であるエローラ遺跡、素晴らしい仏教壁画が残るアジャンタ石窟などを効率よく見て回る。

また美しい海岸が広がるゴアではポルトガル時代のキリスト教建築、「ゴアの聖堂と修道院群」を訪問するほか、リゾートの雰囲気を楽しんでゆったりと過ごす。イギリス統治時代の建物が残り、西欧風の町並みを楽しムンバイは、また喧騒と独特な香り、賑やかな市場などエネルギーにあふれた街でもある。

最近のインドを見ていると、アジアの巨大な象がようやく動き出した感がある。モディ首相が登場して、積極的な経済外交を推進し、外資導入で経済成長が著しい。日本の企業の進出も加速している。今年は G20 の議長国を務め、グローバルサウスの主要国としても存在感を示している。インドは一度や二度行っただけではその片鱗さえ分からない。いままさに「旬の国」であるインドを思い切り探索しようではないか。